品川哲彦氏のコメントに対するリプライ

吉本　陵[1]

品川氏（以下敬称略）のコメントは「天上における地上の人格の分身」の比喩の像概念からはただちに倫理的な含意を引き出すことはできず、それを責任概念と結びつけることには論点の飛躍が含まれていると指摘するものであった。これに対しては、指摘された「論点の飛躍」を辿ることで答えることにしたい。

「天上における人格の分身」の比喩はグノーシス文献（マンダ教の聖典）から採られたものであり、それはグノーシス主義に対して批判的な『有機体と自由[2]』におけるヨーナスの物語る神話とは重要な差異があるというのは品川の指摘の通りである。その上で確認しておきたいのは、それにもかかわらずヨーナスは明らかに、「天上における人格の分身」の比喩や『有機体と自由』に収められた論文「不死性とこんにちの実存[3]」の中で取り上げているその他のグノーシス神話を下敷きにして自身の神話を作り上げているということである。より詳しく言えば、ヨーナスはグノーシス神話における彼岸の至高神による救済の物語を換骨奪胎し、自身の出自であるユダヤの伝統（カバラー）に沿うかたちで自身の神話を語り直しているのである。

ところで、ヨーナスのグノーシス研究によれば、グノーシス主義の神話自体がもともとユダヤ教の聖典（旧約聖書）の神話（天地創造、失楽園など）を換骨奪胎して作り出されたという側面がある[4]。この点に着目するならば、ユダヤの神話をグノーシス主義の神話が語り直し、それを再度語り直したものがヨーナスの神話だということになるだろう。ヨーナスの責任概念はこの神話を「解釈」することによって取り出され、『責任という原理』においては「人間という理念」に対する存在論的責任として論じられることになる。

---

[1] 吉本陵（よしもとしのぐ）。大阪府立大学客員研究員、大阪府立大学工学域非常勤講師（yshinogu@gmail.com）。

[2] Hans Jonas, *Das Prinzip Leben. Ansätze zu einer philosophishen Biologie*, Shurkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1994（細見和之、吉本陵訳、『生命の哲学――有機体と自由』、法政大学出版局、2008年）.

[3] “Unsterblichkeit und heutige Existenz”: in *Das Prinzip Leben*, S.373-397, 邦訳 412-444 頁。

[4] Hans Jonas, “The Gnostic Syndrome: Typology of its Thought, Imagination, and Mood” *Philosophical Essays. From Ancient Creed To Technological Man*. The University of Chicago Press, Chicago/London, 1980, pp.273-274（初版は 1974 年）.

このような神話化・脱神話化（解釈ないし理論的な言語への翻訳）の作業に関して、ヨーナスは自身の学問上の師であり、聖書解釈に「脱神話化」の理論を持ち込んだ当人であるブルトマンについて論じた論文の中で次のように述べている。ブルトマンは脱神話化によって明らかとなった神話の意味内容を神話の言語によって語り直してはならない（それでは無限に続くad infinitumことになるから）と主張しているが、なぜ無限に続いてはならないのだろうか、むしろそれを続けていく必要があるのではないだろうか、と[5]。事実ヨーナスは、グノーシス主義や初期キリスト教の研究において脱神話化を遂行する一方で、自身の哲学を踏み越えて神話の語りを展開し、さらにそれに解釈を施すことによって、神話化と脱神話化の反復を実践しているのである。

「天上における人格の分身」の比喩から責任概念へと続くヨーナスの叙述もまた、上記の反復、すなわち物語としての神話→脱神話化→神話の語り直し（再神話化）→神話の再解釈…という系列の一環として読むことができるだろう。つまりそれ自体旧約聖書の神話を語り直したものである「天上における人格の分身」の比喩（神話）は、それを解釈する（脱神話化）ヨーナス自身によってふたたび語り直され（神話化ないし再神話化）、さらに自身の神話を解釈するなかで「責任」という概念が導出され（脱神話化・神話の再解釈）、それが『責任という原理』において「人間という理念」に対する存在論的な責任として位置づけられたのである。「天上における人格の分身」の比喩と『責任という原理』における「人間という理念」との間にある道筋はこのようにして辿ることができると私は考えている[6]。

---

[5] 「道はいつもただ隠喩から隠喩へと続く。古びてもう使えなくなった隠喩から、鮮やかで魅力的な新しさをもつ隠喩へと続くのだ。なぜなら言語を絶する『現実』は、おそらくはただ間接的にのみ語られ**うる**か、そうでなければ決して『語ら』れ**え**ないのだから」。（Hans Jonas, “Is Faith Still Possible?: Memories of Rudolf Bultmann and Reflections on the Philosophical Aspects of His Work” *Mortality and Morality. A Search for the Good after Auschwitz*, Ed. Lawrence Vogel, Northwestern University Press, Evanston, Illinois, 1996, p.149）

[6] したがって、私の発表原稿において両者の関係を「まっすぐに連なっている」としたことは撤回しなければならない。それに代えて本文の論述を提示しておく。ただしここでの論述も概略的なものにとどまっている。別の機会にさらに詳細を詰めていきたい。